

広大センターの思い出と学生文化研究について

武内 清*

私の場合は、広島大学高等教育研究開発センターにはたくさんの思い出があり、私の高等教育研究や学生文化研究は、その影響を多大に受けたことを感じている。

1つは、最初に研究員集会に参加した時、場所は移転前の広島大学の旧建物で、とても古い建物、また古びた机と椅子の教室で、そこで新しい分野の高等教育研究が始まるという熱気が感じられた。建物や施設の古さとそこで論じられていることの新鮮さの対比が、きわめて印象的であった。

2つ目は、センターの研究員にさせていただき、テーマセッションの報告者にも呼んでいただき報告した。その時は、広島大学の移転先の近代的な建物での会だったと思う。高等教育研究の錚々たる研究者が集まっただけの熱気と知の饗宴が感じられた時代だったように思う。

3つ目は、センターの紀要やさまざまな研究テーマでの冊子を、毎年1回、10冊近く送っていただき、高等教育を研究するものにとって大変ありがたかった。

4つ目は、学生文化に関心があった私としては、「学生消費者主義」「学生の大学」という言葉が使われ、学生の視点からも高等教育論を多く書かれていた喜多村和之先生の著作や、センターの集会での喜多村先生のお話には多くを教えられた。先生の書かれた著作の中に、私が日本の学生の特質について書いた文章（「教師にとってはさびしい時代」『児童心理52号』1985）を引用され、それとの対比でアメリカの学生の消費者的特質を説明されていたことも印象に残っている。

5つ目としては、最近の高等教育研究が、政策的制度的なものが多く、（もちろんそれがメインになるのはいいことだと思うが）、学生や学生文化への視点が欠けているように感じる。

学生に関して言及される時も、大学の制度改革によって学生をいかようにも教育、変容できるという大学教員の思い込みと、学生の心理面への配慮が一番大事だという心理学的視点ばかりが強調されて、学生の社会的文化的特性、つまり学生の多様性や主体性に関する考察が薄れているように思う。

学生文化から生じる新しい時代の文化形成や、学生のアイデンティティ形成や自分探しに関しては、今の高等教育研究から消えている現状に関しては、旧世代として残念に思う。

(中略)

広島大学高等教育研究開発センターが、全国の大学の高等教育センターのモデルとなり、日本の高等教育の研究と実践を牽引していく伝統が今後も続いていくことを願っている。

* 敬愛大学客員教授 / 上智大学名誉教授